

「多面的機能支払」を とことん使いこなす2016

「農地水」から多面的機能支払に変わって、全国の活動組織は1万9018から2万4885に急増。交付金の活用も「地域裁量」でいろんなバリエーションが出てきて、まさに「多面的」に開花中だ。



農道のコンクリート舗装請け負います 集落営農法人が土木作業班を組織した

島根県奥出雲町・保全組織八川地区ふるさと保全会

文・写真 編集部

コンクリート舗装は農家の技術にピッタリ

「よっしゃ、準備はいいか。生コンを流すぞ」

イネ刈りが終わって一息ついた11月初旬、島根県奥出雲町八川地区では恒例となった農道舗装の自主施工が始まる。

近隣集落から依頼された傾斜地の農道（幅2・5m、長さ150m）のコンクリート舗装にあたるのは、農事組合法人「飲水思源の里大谷」直営施工隊の6人。地元からも2人参加した。

「傾斜地の農道は轍にいくら砂利を敷いても軽トラやトラクタが通るたびに流れてしまいます。厚さ10



山際の農道は、2年前に直営施工隊がコンクリートで舗装したところ



奥出雲町は2005年に横田町と仁多町が合併して誕生。八川地区は昭和の大合併以前の旧八川村のエリアにあたる

農事組法人「飲水思源の里大谷」
2004年に設立した「大谷集落営農組合」が母体となり翌年法人化。大谷集落60戸のうち40戸が加入（写真の左端が組合長の石原博さん）。法人の経営は、コシヒカリ20ha、モ千米4ha、酒米2ha、飼料米0.7ha、ソバ1.5ha、ダイズ1.5ha。従業員17人（うち女性4人）



冬の仕事づくりに直営施工隊を結成

石原さんたちが近隣のコンクリート舗装を請け負う直営施工隊を結成したのは2014年春。当時、地元の定年組を法人に雇用して従業員が増えていたので、冬場の仕事を何か増やせないかと考えたのがきっかけだった。

なにせ経営面積30haは、ほぼ水稲が占めているのでイネ刈りが終われば手が空いてしまう。女性たちはイネの育苗ハウスで農協に出すシュンギクやコマツナを栽培したり、干し大根をつくって大阪のデパートに出荷もするが、仕事は多いに越したことはない。

「法人を維持して地域の田んぼを守っていくに

cmのコンクリートで固めれば10年やそこらじゃ、まず壊れんけん」と説明してくれたのは、組合長の石原博さん（66歳）だ。

業者がよくやるアスファルト舗装は、大型のガスターナーや転圧ローラーなど特殊な機材が必要になるが、コンクリート舗装はバックホーや鍬、スコップで十分。農家の技術にピッタリだし、業者任せにせず自分たちでやれば安くあがるというのが石原さんの考え方だ。経年劣化で路面のコンクリートにヒビが入っても、ホームセンターで生コンを買ってくれば、自分たちで直せるのもいい。

それに頑丈な農道をつくっておけば、4tユニットクに田植え機などを載せて運べるので、法人や担い手農家も農作業を受託しやすくなる。

「そうすりゃ田んぼを荒らさずにすむ」という思いも石原さんにあった。